

蛇の「前世」と「今生」——魯迅の描く「蛇」について

(韓国外国語大学大学院) 徐 榛

(東京女子大学講師) 日原 きよみ 訳

〔要旨〕

魯迅の「国人」の国民性と病的社会を暴いた文章の中には、動物の痕跡が見られ、この痕跡は軌を一にして陰に陽に魯迅の描いた病的社会を貫いている。「人」と「獣」の交錯、「人性」と「獣性」の対照が「病的社会」と「獣性世界」を融合させ、極めて荒唐無稽な芸術的手法によって、定めなき「彷徨」を描き出し、耳を劈く「呐喊」の声を上げさせた。このような動物世界の中で、魯迅は「蛇」の形象を原型に、その反逆性、毒性、強靱性などの特徴を文学化し、社会に批判力を賦与し、自ら血の中に溶け込んだ反逆の力を表現した。それによって国民の血の中の劣悪な根を震撼させ、国民に内在する「蛇」の反逆力を呼び醒ましたのである。

I. はじめに

魯迅研究の歴史が物語るように、魯迅はすでに国家的意義の範疇を越え、全世界の学者が注目するところであり、様々な時代、イデオロギー、文化的状況の中にあっても、魯迅とその思想は広く受け容れられ崇拜されている。とりわけ1990年代以降、イデオロギー的な規範から次第に自由になったことも、魯迅研究の視角を拡大させ、魯迅が書いたものとその思想への客観的な再認識を有利にした。昔から言われてきた政治革命者の魯迅、啓蒙思想家の魯迅を継承しつつ、さらに実存主義の魯迅、世俗化された魯迅、現代性を再考する魯迅、ポストコロニアリズムの魯迅、自由主義の魯迅といったものが登場してきた⁽¹⁾。

魯迅の筆は、誰もが知る多くの人物（祥林嫂、魏連受、孔乙己ら）を創造し、作品中の彼らは、詳細的確に中国人像を描き出し、中国の民衆に特有な感情、性癖、根性を暴き出した。それは現代中国人の「人史」と呼ばれるにもふさわしいものだろう。郁達夫は魯迅の死後ほどなく、こう断言した。「中国の民族精神を全面的に理解するには、

『魯迅全集』を読む以外に道はない」⁽²⁾、と。魯迅の筆は微塵の粉飾もなく、真に生き生きと、深く中国現代人の国民的文化心理、行動特性と価値観を描き出している⁽³⁾。この「人史」の巨篇の中に、われわれは魯迅が伝えようとした「人」の感情と想いを捉え、これらの「人」に対する魯迅の批判と期待を読み取ることができる。

魯迅の人物像の創造と描写は、自然単刀直入なものとなり、彼が描いた人物像に関する著名な研究者は多く、論文も枚挙の暇がない。それは魯迅の描く「妖怪変化」に関する研究にまで及んでいる。北京大学の銭理群教授は『魯迅研究十五講』で、「無常」と「女吊」といった鬼神像にも言及し、さらに日本人研究者の丸尾常喜氏は、魯迅の小説中における「人」と「鬼」を分析、大作『「人」と「鬼」の葛藤』〔訳注1：銭理群のは、北京大学出版社、2003年。丸尾のは『魯迅——「人」「鬼」の葛藤』岩波書店、1993年。中国語版は、『“人”与“鬼”的糾葛』秦弓訳、人民文学出版社、1995年〕を著した。さらにこれら「中国人」の国民性と病的社会を暴露した魯迅の文章の行間には、動物の痕跡も発見され、同一線上において陰に陽に魯迅

の描いた病的社会の中に採り込まれている。「人」と「獣」の絡み合い、「人性」と「獣性」の対比が「病的社会」と「獣性世界」を融合させ、極めて荒唐無稽な芸術的手法によって、定まりなき「彷徨」を表現し、耳をつん割く「呐喊」の声を上げさせた。「人獣」を混雑させ描かれた世界は異彩を放ち、人性を麻痺させるものへの深い思索と、病的社会に対する詳細な考察が埋蔵されている。彼によって設計された文学世界の中で、われわれは「人獣」の混在と対比させることで、その精神的世界を理解することができるだろう。

『魯迅全集』を紐解けば、そこに多彩で豊かな動物像を見出すだろう。「狂人日記」中の「趙家の犬」,「鑄劍」の中の「舌を伸ばし、はあはあと喘ぐ狼」,「戦士と蠅」の中の「ぶんぶん飛び続ける蠅」などである。さらに「兔と猫」「犬・猫・鼠」のように魯迅が直接動物名を題にしたものもある。魯迅は文学作品の中に豊かな動物像を移植させたが、文化的審美眼に照らせば、大きく二つの系列に分類することが出来よう。一つ目は、攻撃性を持つもの——梟, 狼, 蛇, 烏など、そしてもう一つは愛らしく弱く小さなもの——犬, 猫, 家鴨, 蚊などである。北京大学の銭理群教授は、かつて魯迅の描く動物について議論しておられるが、これらの動物像の中で、蛇のイメージについてはあまり議論されていないように感じる。彼も「蛇」のイメージについても触れてはいるものの、議論を展開するまでに至っていない。他に日本の学者丸尾常喜氏の書『「人」「鬼」の葛藤』に倣ったものとして、靳新来氏が『“人”と“獣”の葛藤——魯迅の描く動物のイメージ』を著している。彼はその中の一章節で、魯迅と蛇の関係について言及し、作品中に顕れた蛇のイメージについて語っている。しかしその多くは中国本来の文化の中に「蛇」の原型を求めるものであり、いささか単純に思える。そこを出発点とし、筆者は魯迅の文章中の「蛇」の形象が、単なる動物としての「本

性」であるのか、動物としての「蛇」の形象が如何に概念化されていたか、また概念化された蛇のイメージが文学としていかに描かれたかについて論じてみたい。

筆者はこのような問題意識から、まず民俗学から出発し、魯迅の描く「蛇」のイメージの出所を探索した。即ち概念的総合理論を基礎に、魯迅における「蛇」のイメージ概念の形成を探索し、概念的隱喩理論を通じて、「蛇」が魯迅の文学世界へどう移入されたかを検討したい。

Ⅱ. 蛇の「前世」

蛇は中国の十二支の一つであり、龍の後に続く干支である。そのため民間では「小龍」とも称される。中国の民間文化の中で、龍は権威の象徴と見られ、古代の皇帝は「天子」、皇帝の袍は「龍袍」、皇帝の子は「龍子」と称された。龍は天空を馳せ衆生を俯瞰するものであるがゆえに、古代から今日まで、中国における龍文化は隆盛を見てきた。これに較べて蛇に対する認知はかなり希薄だが、興味深いことに、中国の古代文明では、蛇が極めて重要な役割を果たしている。蛇トーテムは大いに流行したトーテムの一つであり、龍の姿もまた蛇の姿から想像し発展させてきたものである。

魯迅は作品中、多くの「蛇」——赤練蛇, 美女蛇, 毒蛇, 白蛇, 蝮など——を描いているが、彼が作品中に埋め込んだ「蛇」の源はどこにあり、どのようなイメージを持ったものなのだろうか。これは注目に値する問題である。

1. 『山海経』から『聖書』へ

中国神話の中では、時代が古い神ほど蛇との関連性が深い。大部分は人首蛇身、蛇をともなった形で現れる。『山海経』をはじめ古籍には、以下のような記載がある。

『山海経・大荒西経』郭璞注：「女媧氏、^{いにし}古え

の女神にして帝者、人面蛇身、一日中七十度^{たび}変ず」。

『山海経・海外北経』：「鐘山の神、名を燭陰と曰う。視れば昼となり、暝すれば夜となり、吹けば冬となり、呼べば夏となる、飲まず食わず息せず、息は風となり、身長きこと千里、無啓の東に在り、其の物たるや人面蛇身、赤くして鐘山の下に居る」。

『山海経・海外西経』：「軒轅の国（皇帝）……女子国の北に在り、人面蛇身、尾は首上に交わる」。

『帝王世紀』：「女媧氏、亦た風姓なり。笙簧を作り、また蛇身人首なり」⁽⁴⁾。

『拾遺記』：「蛇身の神、即ち義皇なり」⁽⁵⁾。

王延寿の「魯霊光殿賦」にもこう記載されている。「上紀開闢、遂古の初め……伏羲鱗身にして、女媧蛇軀なり」。他にもある学者の考証では、夏禹は姓姁、姁は即ち巳、巳は即ち蛇である。禹の字は虫に従う。甲骨文中ではまた巳と同字である。すなわち禹の字はもともと蛇の名である。蛇は夏王朝時の主要なトーテムの一つなのである⁽⁶⁾。『山海経』の中にも蛇のトーテムについての記載がある。人首蛇身の神人形象は、『山海経』の中に頻繁に現れるが、当然その他の古籍中にも大量に出現する、動物と人が結合された形象である。神話におけるこれらの特徴もまた人類の生活における「蛇」との密接な関係を示すものである。

おなじように『山海経』は魯迅の小説中にも現れている。『朝花夕拾』に収録された「阿長と山海経」には、少年だった「私」が絵入りの本が大好きだったという記載がある。『『山海経』という本の名は聞いてはいたが、まだ見たことはなかった。その中には九つ頭の蛇、三本足の鳥といった獣たち、羽を生やした人間……が描かれている。また二十数種に及ぶ蛇（大蛇、長蛇、鳴蛇、飛蛇、白蛇、玄蛇、黒蛇、青蛇、赤蛇、黄蛇

……）もいる」と。阿長が「私」にこの本を持ってきてくれた時、魯迅はこう書いている。「私は雷に打たれたように全身が震えた。急いで受け取り紙包みを開いてみると、それは四冊の小さな本だった。ぱらぱらとめくってみると、人面の獣、九頭の蛇……確かに皆その中にあった」⁽⁷⁾。この文章の中には「九頭の蛇」が通算3回も出て来る。子供だった「私」がいかにも『山海経』に夢中だったか。当然、蛇に対しても深い関心があっただろう。

『山海経』の中の「蛇」と様々な関わりを持つものとしては、『故事新篇』中の「補天」である。魯迅は「補天」の中に直接「女媧石を練り天を補う」の神話を移入した。「女媧、古えの神女にして帝者、人面蛇身なり」⁽⁸⁾。銭理群教授は「補天」に言及した折、魯迅は改めて女媧の形象を創り上げ、自らの天性をその中に融合した、と分析した。そうであるなら、魯迅は自己の精神を半人半蛇の形象の中に融合していることとなり、その意味は更に深いものになる。

とりわけ興味深いのは、魯迅が『墳』中の「摩羅詩力説」中でこう述べていることだ。「エデンに、生命の樹、知識の樹と言われるものがあつた。神は人がその実を食べることを禁じた。悪魔は蛇に託してエバを誘惑し、それを食べさせた。そこで彼らは生命の知識を得た」と。魯迅は「エバと蛇」の絵を所有しており、さらに蛇が画かれた多くの西洋画を持ち、蛇好きだったと言われている⁽⁹⁾。この記載は『聖書』をもとにしているが、キリスト教では、蛇もまた重要な生き物である。しかしその形象は奸佞狡猾で、罪惡の根源、誘惑と悪魔の化身、神に逆らう力と見なされた。

『聖書』冒頭の「創世記」における蛇の形象は、はなはだ冴えないものだ。『聖書』はこう述べる。「主なる神が造られた野の生き物のうちで、蛇が最も狡猾であつた」〔訳注2——聖書の引用は本来新共同訳に拠るべきであるが、ここは中国語原

文に近い日本聖書協会1955年改訳版に拠った。創世記第3章1節]。蛇の誘惑で、エデンの園のアダムとエバは禁断の木の実を食べてしまった。『聖書』の黙示録における蛇は最後に悪魔サタンの化身として、戦いに敗れる姿として登場する。「マタイによる福音書」で、神はさらに邪悪な人を「毒蛇の仲間」と名指している。『聖書』における蛇の形象は全て「悪」の一字に集約されるのである。すなわちキリスト教の影響を受けた文化の中では、蛇は通常、邪悪さの代表であり罪の源なのである。

しかし魯迅は、このいわゆる「悪魔」の「蛇」の中にこそ、彼の追求する「力」を見出している。アダムとエバは蛇の誘惑で、「知識の樹」の実を食べたことではじめて「目が啓け、自己を認識した」のである。蛇が神の意志に背いた反逆性はまさに魯迅が発掘したかった「力」なのだ。魯迅はこの「蛇」と同じように、中国社会への疑問を提出した。

われわれは、魯迅の『山海経』と『聖書』に対する受容が、自ずから「蛇」を接合点として選択したものであることを知るだろう。しかし魯迅がこの二つの「経典」から受けた「蛇」の視点はそれぞれ性格が異なっている。『山海経』から得た蛇の形象は、魯迅の創作中の「蛇」のイメージの原型で、神奇で神秘的なもの、神聖なものである。それに対して『聖書』の中の蛇は、多く邪悪の化身であり、誘惑と反逆に満ちたものである。魯迅における「蛇」のイメージは、邪悪の反逆性をプラスのエネルギーに変え（誘惑の意味についてはここで保留し、再度、次章で検討する）、このプラスのエネルギーこそが魯迅を「彷徨」から脱却させ、「呐喊」の声を上げる力となったのである。

2. 『白蛇伝』から『悪の華』へ

魯迅の故郷浙江は、まさに『白蛇伝』物語の発祥の地である。『白蛇伝』は人口に膾炙した民間

伝説であり、断桥相遇、白蛇報恩、懸壺濟世、白蛇産子、雷峰塔被鎮、出塔昇仙、といった幾つかの物語を主要プロットとしている。「白蛇」の形象もまた一貫して人々に愛されてきた。「白蛇」は善良で美しく、高い医術を持つものの象徴である。魯迅の「雷峰塔の倒壊について」と併せ見れば、魯迅の『白蛇伝』受容の在り方が分かる。魯迅は幼い頃、祖母が語る「白蛇娘娘」の物語を聞き、「白蛇娘娘」に同情し愛護の想いを抱いた。彼はこう書いている。

その時の私の唯一の希望は、この雷峰塔が倒壊することだった。後に大きくなって、杭州へ行き、そのぼろぼろになった塔を見たが、気持ちは晴れなかった。後で本の中で、杭州の人がこの塔を「保叔塔」とも呼んでおり、それは本来「保俶塔」と書くべきで、銭王の息子が作ったものであると書かれているのを見た。それなら当然塔の中に「白蛇娘娘」はいないことになるのだが、私の気持ちは依然、晴れず、それでも塔が倒壊することを願ったのだった¹⁰⁰。

魯迅が雷峰塔の倒壊を望んだのは、一つは「白蛇娘娘」への愛惜と同情に起因している。この塔の下に実際には「白蛇娘娘」はいないと知ってもなお、最初の想いは消えず、その倒壊を願っているところに、われわれは魯迅が本当に蛇を愛していたことを知るだろう。この想いはもはや伝統的な物語中の「白蛇」の形象に留まらない感情と言える。

雷峰塔が本当に倒壊した後、魯迅は一種名状しがたい快感を覚えた。しかし魯迅は完全に恨みを解いたわけではない。さらに辛辣に法海和尚の末路をこう嘲笑している。

最初、「白蛇娘娘」は塔の下に押し込められ、法海禪師は蟹の甲羅の中に隠れていた。しかし

今は、この老禅師一人が静かに坐っており、蟹の種族が絶えるその日まで、出て来ることができない。彼が塔を作った時、塔は壊れるものだと思い至らなかったのだろうか。ざまあみろ！⁽¹¹⁾

「蟹の種族が絶えるその日まで、出て来ることができない」に、魯迅の法海への根深い恨みが見てとれる。この恨みの深さはそのまま「白蛇娘娘」への愛の深さとなる。雷峰塔の倒壊後、魯迅は直ちに「雷峰塔の倒壊について」に続く「再び雷峰塔の倒壊について」を書いており、雷峰塔への関心の深さを示している。この文章は一般的に、魯迅の反封建主義思想を示すものとして論ぜられるが、角度を変えて見るなら、これは明らかに魯迅の民間故事「白蛇娘娘」に対する潜在意識の反映であり、この潜在意識は、蛇に対する感情から来るものである。

他にも、魯迅は幼少時代の記憶を描いた「百草園から三味書屋へ」の中で、「美女蛇」についても触れ、その形象もまた人首蛇身である。魯迅は「美女蛇」の物語をこう描いている。

生い茂った草むらの中には行かないことにしていた。なぜならこの園の中には一匹の大きな赤まだら蛇が居る、という言い伝えがあったからだ。

長媽媽がこんな話を聞かせてくれたことがある。昔、一人の書生が古寺に住んでおり、勉強に精を出していた。夜、中庭で涼んでいると、突然誰かが彼を呼んでいる声が聴こえた。それに応えて辺りを見ると、なんと一人の美しい女が塀の上から顔を出しており、彼に向かってほほえみかけて隠れてしまった。彼は喜んだ。しかしいつも夜に無駄話にやってくるあの和尚さんに秘密を見破られてしまった。彼の顔には妖気が漂っている。きっと「美女蛇」に遭遇したと違いない、と。それは人首蛇身の怪物で、人

の名を呼ぶことができ、ひとたび返事すれば、夜やってきて、その人の肉を食らうのだと⁽¹²⁾。

これは『山海経』中の「人首蛇身」の形象から延長された描写であり、魯迅はこの物語を通じて、人たるものの危険を深く感知している。続く描写は極めて興味深い。

百草園の草むらの傍を歩く時、いつもそのように考えた。しかし今に至るまでまだ手に入っていない。また赤まだら蛇にも美女蛇にも遭遇していない。私の名を呼ぶ見知らぬ声は当然いつもあるのだが、すべて美女蛇ではない⁽¹³⁾。

「美女蛇」の誘惑に満ちた呼び声は危険性を帯びているが、幼い頃の魯迅は好奇と未知に溢れ、自分の名を呼ぶ声が聴こえることを期待していた。明らかにここでの魯迅の老和尚に対する認識、感情は、法海に対する認識、感情と同じものである。彼らのおせっかいを恨むのは、「美女蛇」に本当は別の下心があっても憚らないからだ。そこに彼の「蛇」に対する並々ならぬ感情がある。

魯迅はフランスの象徴派詩人ボードレールを愛していた。「蛇」はまた魯迅のみならずボードレールも愛したイメージであり、その詩集『悪の華』中にも多く詠われている。例えば「祝福」という詩にはこうある。

弥^{いやたか}高い天なる力の、特に命ずるところによって、／〈詩人〉が、倦怠^{アンニエ}に悩むこの世に現れ出る時、／その母親は、おそれおの^{ののしり}のき、冒瀆を胸に湛えて、／拳^{こぶし}をわなわなと震わせる、憐み給う神に向って。／——「ああ！なにゆえ^{まむし}蝮のひと塊を産み落とさなかったのでしょうか、／こんなおかしい笑いのものを育てるほどなら！／私の腹が、この身の贖^{あがな}いの種を宿した、／はかない^{けらく}快樂の夜こそは、呪われてあれ！／御身が、

ありとある女の中から私を選び、／私のみじめな夫の嫌悪^{まど}の的にと仕立てられたのだし、／このひねこびた異形^{いぎよう}の物を、恋文さながら、／炎の中に投げこむわけにも参りませぬゆえ⁽¹⁴⁾。

ここにはボードレールの反逆性が見てとれる。この毒蛇は詩人の反抗の産物なのである。魯迅の「墓碑銘」の中の毒牙をもった蛇とボードレールの毒蛇は似ている。ボードレールは『悪の華』中の他の詩にも多く「蛇」のイメージを用いている。「波打つ真珠母色^{しんじゅも}の衣裳をまとい」における蛇の女性の誘惑、「憎しみの樽」の中の九つの頭の蛇の仇恨と汚毒、「警告者」中の黄色い蛇、蛇の牙の汚毒と恐怖、「眉をひそめる月」の中の頭と尾を交える毒蛇の誘惑……。ボードレールの詩は、蛇の汚毒、誘惑、美しさ、仇恨と恐怖を詠う。魯迅は自らの文学創作の中で、このボードレールが表した蛇の形象をも継承し、転化させている。

以上論じてきたように、筆者は民俗学の視野から出発し、東西の文化古籍、伝説や文学作品の中に魯迅と関連を持った「蛇」の形象を捜し出した。そして魯迅の作品中に現れる「蛇」の形象と平行対比を行い、魯迅の作品における「蛇」の形象の多くが東西の古籍と文学作品の中から来ていること、正確に言えば、その深い影響を受けていることを発見した。しかしその間には、まだ転化と再整合の過程があり、また検討を要する課題である。

Ⅲ. 蛇の「今生」

前章では魯迅の作品中に現われる「蛇」の形象の出所について考察してきたが、ここでこれらの「蛇」の形象がいかなる転化と再整合を経て魯迅の「蛇」のイメージを形成したかを論じなければならぬ。考察にあたっては、文化イメージの継承と転化の問題を考えるとともに、魯迅自身の状況への考察も必要となり、問題は複雑になる。そこで筆者は概念整合理論を借りて、考察と探索を

試みたい。概念整合が為された後に生まれる新しい概念がさらにどういった意味を伝えてくれるだろうか。

1. 「蛇の相」の「本性」

古籍では、南方民族は蛇の子孫であると記載されている。

『説文解字』：「南蛮は蛇種なり」⁽¹⁵⁾。

『説文解字』：「閩、東南越は蛇種、虫に従い、門の声」⁽¹⁶⁾。

『説文解字』に記載する「閩、東南越、南蛮」には、浙江、福建、湖南、広東、広西等の地が含まれる。魯迅の故郷はまさに浙江であり、しかも浙江は春秋時代、越の国の中心だった。「越は巳の地にあり、其の位は蛇なり」との記載もある。浙江の地は「蛇位」に位置し、その地の人はまた蛇種である。さらに奇妙なことに魯迅自身が巳年で（魯迅は1881年生まれでこの年の干支は蛇）、まるで暗に魯迅と蛇を関係付けているかのようだ。干支については、さらに面白い話がある。1923年8月、北京で生活していた魯迅が借りていたのは磚塔胡同61号だったが、同じ院の兪家の二姉妹は一人が猪年、一人が牛年だったので、魯迅は二人を「野猪」「野牛」と呼んでいた。子どもたちの方も「子の矛を以て、子の盾を攻」めんと、お返しに彼のことを「野蛇」と呼び、魯迅はそれを喜んで受け入れていた⁽¹⁷⁾。ここからも分かるように、魯迅と蛇は切っても切れない関係で、自らを蛇にさえ準えていた。

ともあれ、魯迅自身の状況と外界の文化イメージの受容が、ともにその創作中における「蛇」に対するイメージ描写に影響を与えていることは確かだろう。ここで概念整合理論を用いて、「蛇」イメージの再整合について分析をしてみたい。

概念整合理論はFauconnierとTurnerに代表され

る、アメリカの学者たちによって創成、発展された理論である。それは意義の構造を探索するものであり、とりわけ実時的意義によって、情報整合の理論体系を構築する。すなわち、異なる認知領域から来る体系を結合させた、一連の認知活動である。それはまず人類にとって普遍的認知メカニズムである心理的空間を基本とする。われわれが思考したり話をしたりする時、その時の理解と行動を完成させるために構築する概念集である¹⁸⁾。この基礎の上に類属空間、インプット空間 1、インプット空間 2、整合空間の四つの抽象空間を立てる。二つのインプット空間は生まれてくるべき整合空間に「インプット」を提供し、「類属空間」

もまた生まれるべき整合空間に注入を与える。それは二つのインプット空間の上に構築されるものであり、類比認知を経て建てられた選択性空間は、二つのインプット空間から来た共通の抽象構造を反映する。整合空間は二つのインプット空間の相関域の全背景を受け継ぎ、模型知識を構築、認知して、新しい認知に達する。

概念の整合を通じて、われわれは魯迅が描いた「蛇」イメージの概念形成のネットワークを明確に掴むことができる。以上で考察した魯迅の「蛇」の相関関係の出所について、概念的総括を行うと下図のようになる。

図 1 『山海経』と『聖書』

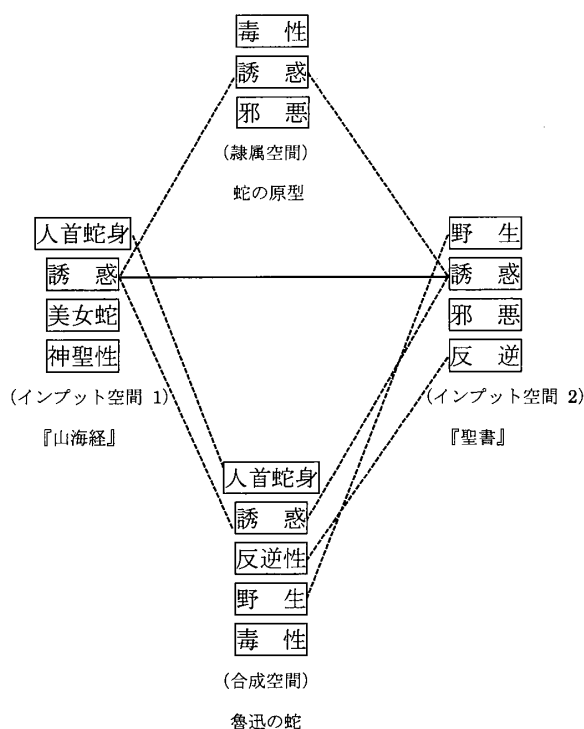
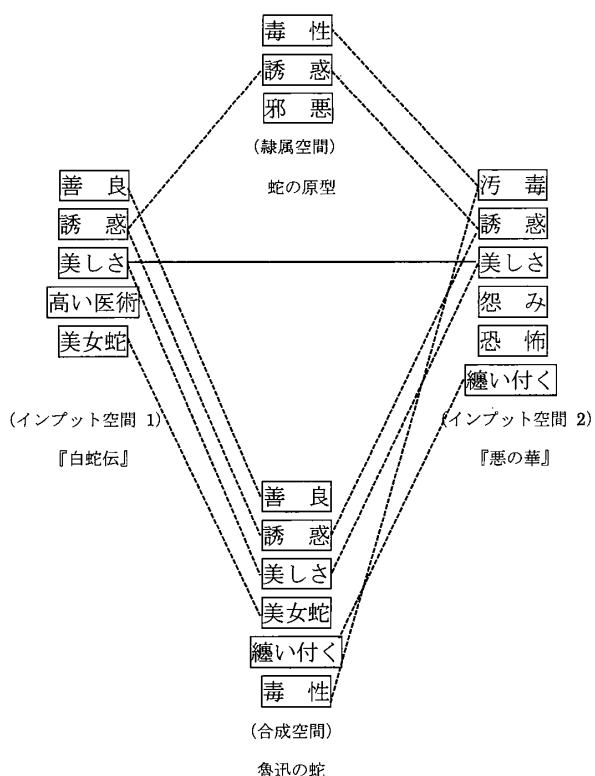


図 2 『白蛇伝』と『悪の花』



上の図表から、魯迅の描く「蛇」のイメージが東西の「蛇」の形象を受容し、衝突と醗酵を起こしていることが分かる。「蛇」の美女、誘惑、半人半蛇といった形象を受容し継承すると同時に、「蛇」の邪悪、野性、恐怖といった特性に対して

概念整合と再加工を行うと、それらの特性から離れていないと同時に反逆性等の特性が突出してくる。「負の概念」を「正面化」することで、そこから魯迅の特徴を備えた「蛇」の形象が形成されているのである。

魯迅は「蛇」の特徴を整合加工した後、「蛇」本来の特性を際立たせ、「蛇」の超越的本性の持つ文化的意義を豊かにした。では「蛇」の本来的特徴は、どう転化し文化的隠喩に富んだ象徴となったのだろうか。以下に詳説、分析してみたい。

2. 「恋蛇」の隠喩

概念整合理論と概念隠喩理論は密接な関係にある。隠喩の修辞観では、隠喩は純粋な言語現象の一種と見なされる。それは言語運用における正規の言語に対する乖離と変異であり、文学言語を潤色する修辞手段の一種、主として言語を装飾する働きを持つものである⁽¹⁹⁾。言語学、心理学、認知学が発展するにつれ、ある学者は認知角度からの隠喩、即ち概念隠喩理論を提起した。隠喩は言語の単なる修辞手段に留まらない、一種の思惟方式である、と。この種の思惟方式は具体的には、旧知から新知へ向う段階的發展、旧知から新知への延長と浸透、熟知化と非熟知化、或いは新しいものを創造していく波状式連続転化のプロセスとして現れる⁽²⁰⁾。ここからわれわれは、隠喩がすでに言語範疇という狭隘な意義を超越し、文化思惟の層にまで上昇、浸透しているのを見出すことができる。

これに魯迅の描いた「蛇」を照らし、正式に隠喩的思惟を運用した結果、「蛇」はすでにその本来の意義を離脱し、魯迅の文字中に特有のイメージ概念と文化的記号を形成していることが分かる。魯迅の筆法では、彼の隠喩的思惟はイメージから生まれ、イメージを運び手とし、イメージの新概念（新意義）を産みだして終わる。著名な学者李欧梵は「私は、魯迅の初期雑文が持つ独特な側面を『隠喩方式』としたい。これは、文章内容の寓意の幅を広げることのできる形象と警句を強化することで、非系統的思想を表す形式である。だから、ここから達成された抽象化の度合いによって、それらの形象を複雑なレベルの意義を内

包した隠喩に変えることができるのだ。……後に、二十年代の反伝統への情熱が衰退したことで戦闘的感情が減退するに従い、さらに彼自身が雑文による芸術著作への確信を強めるに従い、これら『隠喩方式』も次第に熟達していった」⁽²¹⁾と論述している。筆者は、雑文だけではなく、まさに李欧梵が言うように、魯迅の後の小説作品、或いは散文詩作品においても、「隠喩的思惟」の痕跡がより明確になった、と考える。その人物形象、「鬼怪」形象のみならず、動物形象の設定においても、彼の思惟方式は全てイメージ、ロジックそして隠喩を相互に滲透させ転化させたものとなっている。

このような「隠喩的思惟」の思考の下で、魯迅が寵愛する「蛇」はいかなる隠喩の言葉を伝えているだろうか。筆者は、「蛇」のイメージは概念整合と隠喩思惟の働きの下で、魯迅の創り出した文学世界において、以下幾つかの「隠喩概念」を表している、と考える。

(1) 放逐され、片隅に置かれるもの。魯迅は『墳』の後に記すにこう書いている。「私も時にはこうも考える。このように傍らの人たちを駆除しているが、その時になってもまだ私を唾棄しないものは、それがたとえ梟蛇鬼怪であっても私の友である。いや彼らこそが私の友である」⁽²²⁾。さらに『兩地書一一二』の中でもこう書いている。「我は名声も地位も何もいりません。梟蛇鬼怪さえあればそれで十分です。このような物たちに対してだけ、私は友と呼びましょう」⁽²³⁾。魯迅は傍らの人たちを駆除し、梟蛇鬼怪だけと伍したい、と言っている。彼は人の世界から隔離され、神怪、動物の世界へと向かった。しかし実際、魯迅が「人」の社会から放逐され擲棄されたのは、自らが主体的に「撤退・隔離」したためだった。「蛇」の本性はまさに草莽の間に生存するもので、家畜の世界にはほとんど融合できない。魯迅のこういった自己放逐と靈魂の撤退・隔離も文学作品の中に「隱晦」として現れている。

(2)「毒性」、反逆性。魯迅は「墓碑銘」の中でこう書いている。「一游魂あり、化して長蛇となり、口に毒牙有り。それを以って人を噛まず、自ら其の身を噛む、終に以って殞顛す」²⁴⁾。「髪の話」の中で、「N先生」は激怒して言う。「君たちの口には毒牙がないのに、どうしてわざわざ額の上に「蝮蛇」の二つの大きな文字を貼り付けて、乞食に撃ち殺させようとするのだ」²⁵⁾。魯迅は蛇の毒性を排除しておらず、毒蛇の陰險さや恐ろしさを批判していない。それはまるでエデンの園の蛇のようだ。魯迅は一般的認識に反して、「毒性」の持つ反逆的意義に惹かれていた。それゆえに彼の描く「毒蛇」のイメージも一般常識の中の邪悪、恐怖として認知されるのではなく、新しい「反逆」の意義の代名詞を賦与した。この種の反逆は、魯迅の文章中の随所に見られる。さらに蘇雪林は直接、魯迅を「老毒蛇」と呪った。彼はこう言う。「腹は毒液に満ち、人に向かって発散されることはない、だから奇毒が心を攻め、勢いまさに自壊せんとするのだ」²⁶⁾と。「狂人日記」の中の「食人」の習俗にせよ、「祝福」の中の「靈魂」の覆滅にせよ、魯迅は決して多くの人の辱罵を恐れなかった。彼はおそらく、自分がその中に沈淪することを恐れ、さらにこれらの「毒性」が「毒」として足りるか、この社会の「倫理道德」を転覆しうるかをより懸念していたのである。ゆえに魯迅はこう自白する。「私は確かによく人を解剖する。しかしもっとよく私自身を情け容赦なく解剖している」²⁷⁾。彼の反逆性はこの社会に対する反逆に止まらず、自分自身に対する警告と覚醒を促すものだったのである。

(3) 絡みつく「強韌性」。「蛇」は絡みつく特性を持つ。蛇は獲物を動かなくさせた後、まずそれに纏わりつき、窒息するのを待って食す。魯迅も自らをそのように喩え、自らをこう表した。「毒蛇の如く纏わりつき、厲鬼^{れいき}の如く執着する」²⁸⁾。ともあれ、「彼」はこの「人」の世界とともにあ

ることを恥じない。馮雪峰もこう言っている。「魯迅は『毒蛇と同じように、厭くことなく人に纏わり殺す‘韌’の戦法』を備えている」²⁹⁾と。魯迅は「蛇の強韌性」でこの社会と戦い続けた。『熱風』の中では、小は中国人の「髭」や「髪飾り」から、大は「父権」や「女性」に至るまで、余す所なく語られている。魯迅はその「毒蛇」の体のような言葉で強い糾弾と諷刺をしたのである。

(4) 絶望の末の希望。魯迅は「蛇」によって道を喩えた。「傷逝」ではこう書いている。

新しく生きる道はまだ沢山ある。私がそこに踏み込んで行かねばならない。なぜなら私はまだ生きているから。しかし、どうやってその一步を踏み出せばよいか、私にはまだ分からない。ある時は、その生きる道が、一匹の灰色の蛇のように、自らうねうねと私に突進してくるのが見えるように思う。私は待ち、また待ち、それがすぐ近くに来るのを見る。ところが、それは忽然として暗黒の中に消え去ってしまう³⁰⁾。

道は「灰色の長い蛇」のようで、第一步を踏み出さなければ、近づいてくるが、また突然黒暗の中に消え去ってしまう。筆者はこの「灰色の長い蛇」のように忽然と消えてしまう道こそ、実は希望の道であると考え。存在があって初めて消失を語ることができる。ないようで実はあるもの——ここで魯迅は絶望を否定し、希望をもちだした。「彷徨」の冒頭ページには屈原の詩が引用される。「路は漫漫として其れ修遠なり、われまさに上下して求め索ねんとす」。「遠い」と言いつつも、重点は「求める」ことにある。さらに興味深いのは「彷徨」にはもともと蛇の意味があることである。筆者は、魯迅は道を蛇に喩え、「道」はくねくねと長い、探し求められることを示した、と考える。まさに「故郷」で「この世界にもともと道はなかった。歩く人が多くなれば、それは道

にもなる」と言っているように。「蛇」のイメージはまた、希望の道の象徴としても認知されよう。

IV. おわりに

魯迅の描いた人物形象が人に与える悲しさ、可笑しさ、生真面目さといった感情的体験から離れ、魯迅の動物世界に眼を転ずれば、更に豊かで多彩な魯迅の感情を体感できる。魯迅の「蛇」に対する深い愛、そして「蛇」に託した感情、想いから、われわれにより明確に魯迅が陰の世界の中で示した社会への反逆と未来への期待を見出すことができる。

魯迅は雑文「中国人の顔を略論する」の中で、沈痛なユーモアを籠めて、「西洋人の顔」と「中国人の顔」を二つの公式に概括し、「人+獣性=西洋人」「人+家畜性=ある種の人たち」としている。さらに彼はこう評述する。「野牛が家畜牛となり、イノシシがブタとなり、狼が犬となれば、野性は消える。しかし、もっぱら羊飼いに愛されるのは、自身に良い所がない者だけだ」。中国人の「獣性」の消失は、正に「次第に飼いならされていく」ことを示している。魯迅は同国人がすでに原始の「獣性」を喪失していることを悲嘆している。この「獣性」こそが当時の社会を変える重要な力だったからだ。同胞が「獣性」を失っているなら、動物の体から再度それを捜し返すしかない。魯迅が「蛇」に思いを寄せたのは、「蛇」の持つ野生であり、「毒性」「謀反性」「強韌性」であり、これぞまさに中国人が失った本質であり、魯迅のいう社会を変革する原始の力なのではあるまいか。「蛇」はすでに原始的な認識の中にある邪悪と恐怖の化身ではなく、希望の道へと歩む伴走者なのである。魯迅の「蛇」には、生命哲学の自己イメージが含み込まれている。「蛇」もまた新しい文化的隠喩が付与され、狭い空間的、概念的理解の殻から脱するものだ。

魯迅の描いた動物世界にはまだ多くの思索と研

究に値する部分も多く残されている。「蛇」のイメージに関する討論もまだ考察の余地があるだろう。

[注]

- (1) 靳新来「重新回到魯迅那里去（自序）」『“人”与“獸”的糾葛——魯迅筆下的動物意象』上海三聯書店，2010年。
- (2) 郁達夫「魯迅的偉大」陳子善・王自立編『郁達夫憶魯迅』花城出版社，1982年，21頁。
- (3) 前掲，靳新来「導論」『“人”与“獸”的糾葛——魯迅筆下動物的意象』。
- (4) 魏晉・皇甫謐『帝王世紀』卷一，『二十五別史』第一冊，齊魯書社出版，2005年，2-3頁。
- (5) 晋王嘉『拾遺記』中華書局，1981年，38頁。
- (6) 吳立莉，楊繼玲「東西蛇文化的比較」『合肥工業大學學報（社會科學版）』2004年，116頁。
- (7) 『魯迅全集2』人民文學出版社，1956年，231頁。
- (8) 『古本山海經図説』山東画報出版社，2001年，575頁。
- (9) 前掲，靳新来，98頁より転載。
- (10) 「論雷峰塔の倒掉」『魯迅全集1』1956年。
- (11) 同上。
- (12) 「從百草園到三味書屋」『魯迅全集2』1956年。
- (13) 同上。
- (14) <http://site.douban.com/133180/widget/articles/5693497/> [訳注3：翻訳及び題名は阿部義雄訳『ボードレール全詩集1』ちくま文庫，1998年に拠った]。
- (15) 後漢・許慎『説文解字』中華書影印本，1963年。
- (16) 同上。
- (17) 俞芳「我記憶中的魯迅先生」『魯迅回憶錄』（下），北京出版社，1999年参照。前掲，靳新来，94頁より転載。
- (18) Fauconnier G. & Turner M., *The Way We Think conceptual blending and the mind's hidden complexities*, New York, Basic Books, 2002, p.102.

- (19)張磊「隱喻与文化」『清陵師範学院学報』2005年，45頁。
- (20)同上。
- (21)李欧梵『鐵屋中的吶喊』河北教育出版社，2001年，108－109頁。
- (22)「写在『墳』後面」『魯迅全集 1』1956年。
- (23)「兩地書一一二」『魯迅全集 9』1958年。
- (24)「墓碣文」『魯迅全集 2』1956年。
- (25)「頭髮的故事」『魯迅全集 1』1956年。
- (26)蘇雪林『魯迅伝論』孫郁編『被褒瀆的魯迅』群言出版社，1994年，271，273頁より転載。
- (27)前掲，「写在『墳』後面」。
- (28)「華蓋集・雜感」『魯迅全集 3』1956年。
- (29)前掲，靳新来，98頁より転載。

[参考文献]

- ・『魯迅全集』人民文学出版社，1956－58年。
- ・靳新来『“人”与“獸”的糾葛——魯迅筆下的動物意象』上海三聯書店，2010年。
- ・陳子善・王自立編『郁達夫憶魯迅』花城出版社，1982年。
- ・『二十五別史』第一冊，齊魯書社出版，2005年。
- ・王嘉『拾遺記』中華書局，1981年。
- ・吳立莉，楊繼玲『東西方蛇文化史比較』合肥工業大學學業（社会科学版）2004年。
- ・『古本山海經図説』山東画報出版社，2001年。
- ・許慎『説文解字』北京，中華書局影印書，1963年。
- ・俞芳「我記憶中的魯迅先生」『魯迅回憶錄』（下）北京出版社，1999年。
- ・Fauconnier G. & Turner M., *The Way We Think conceptual blending and the minds hidden complexities*, New York, Basic Books, 2002.
- ・張磊「隱喻与文化」『清陵師範学報』2005年。
- ・李欧梵『鐵屋中的吶喊』河北教育出版社，2001年。
- ・孫郁『被褒瀆的魯迅』群言出版社，1994年。